陰陽書

れば、腰刀をぬきてわりたれば、中に小蛇わだかまりて有けり、針は蛇の左右の眼に立たりけり、義家何となく中をわると見へつれ共、蛇の頭を切たりけり、名をえたる人々のふるまひかくのごとし、ゆゝしかりける事也、この事いづれの日記にみえたりといふ事を玄らね共、普く申傳へて侍り、陰陽師吉平晴明子醫師雅忠と酒をのみけるに、雅忠盃をとりてうけて玄ばしもたれけるを、吉平みて御酒とくまいり給へ、只今ないのふり候はんずるぞといひけり、其ことばたがはず、やがてふりければ、酒がふときてこぼれにけり、ゆゝしくぞかねていひける也、

〔類聚雜例〕長元三年三月廿二日乙亥、近曾守道卒去、陰陽道已斷盡之中、曆道全無其人、方々有此災、可歎可恐々、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年十一月癸未、勅曰、如聞、頃年諸國博士醫師多非其才、託請得選、非唯損政、亦无益民、自今已後不得更然、其須講、○略中陰陽生者、周易、新撰陰陽書、黃帝金匱、五行大義、○略中並應任用、被任之後、所給公廨一年之分、必應令送本受業師、如此則有尊師之道、終行教資之業、永繼國家良政、莫要於茲、宜告所司、早令施行、

〔續日本紀考證七孝謙〕新撰陰陽書、唐志王璨新撰陰陽書三十卷、現在書目錄、大唐陰陽書五十一卷、新撰陰陽書五十卷、呂才撰、元融按、依唐志、呂才陰陽書五十卷、與王璨新撰陰陽書自別、現在書目錄、以二書爲呂才所撰、又差其卷數、恐誤、黃帝金匱、唐志曹士蔿黃帝金匱經三卷、現在書目錄五行家、黃帝金匱經十卷、黃帝金匱疏四卷、陳氏撰、按三代實錄貞觀十六年五月、陰陽頭兼陰陽博士滋岳朝臣川人傳云、川人作金匱新注二卷、本朝書籍目錄亦載金匱新注二卷、滋岳川人撰、蓋與此所云金匱同書也、五行大義、現在書目錄又載之、狩谷氏曰、唐志有蕭吉五行記、即此、元融按、林述齋先生佚存叢書第一帙收五行大義五卷、清阮元研經堂外集五行大義提要云、隋唐志均未著錄、蓋以其題名少異、偶失檢耳、

〔日本後紀八桓武〕延曆十八年二月乙未、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣清麻呂薨、○略中長子廣世、○略中大學會諸儒講論陰陽書、新撰藥經、大素等、

〔本朝書籍目錄〕陰陽

世要動靜經、三卷、滋岳川人撰、

六甲六帖、同撰、